NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

July 2025　vol.41

Grand Toit 20th

島根県立石見美術館ニューズレター

開館20周年記念企画展「生誕100年　森英恵 ヴァイタル・タイプ」

1961年の森英恵

開館20周年記念企画展「美術館がうまれて、それから―コレクションと石見美術館の20年―」

この地に美術館がうまれて、それから何が起こったか？

開館20周年を迎えて

100年に向かう20年

41

森英恵《イヴニングアンサンブル》　1977年　HANAE MORI HAUTE COUTURE　写真：小川真輝

企画展

開館20周年記念企画展「生誕100年　森英恵 ヴァイタル・タイプ」

2025年9月20日(土)～12月1日(月)

休館日：毎週火曜日(9月23日は開館)、9月24日　開館時間：9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

図1

図2

図3

図1. 初めてのパリ、松本弘子さんと

図2. パリで作ったシャネルスーツを着てテレビ出演する森英恵(左)。右は女優の芦原邦子

図3. ニューヨークでオレグ・カッシーニ氏と

※写真はいずれも森英恵事務所提供

1961年の森英恵

2022年に惜しまれつつ亡くなった森英恵の没後初、そして生誕100年を記念する展覧会をこの秋に開催する。文学を学びながら創作活動に取り組みたい気持ちを持ち続けた森が、結婚後それを服飾において形にし、世界的に活躍した、その軌跡を改めて紹介する内容だ。森のキャリアを見渡すと、転換点として1961年が浮かび上がってくる。映画衣装の仕事に邁進した初期と、アメリカで活躍する第2章ともいうべき時期(1965年～)の繋ぎ目にあたり、初めて渡仏・渡米を経験し、アメリカで仕事をするという次の目標を定めた年である。1961年の森英恵を追いかけてみたい。

森が渡仏したのは1月。親友でピエール・カルダンのモデルである松本弘子と一緒に向かった(図1)。このパリ行きについて、森は「思い立って簡単な旅支度でパリへ飛んだ。」と著書※に記しているが、実際はそんなに容易なものではなかった。前年まで森は猛烈に仕事に打ち込んでいた。1954年から始まった映画衣装の仕事は評判となり、五社(日活、松竹、東宝、東映、大映)掛け持ちの忙しさ。顧客の服も当然作り、さらに新聞や雑誌に記事を寄せ…と1日4時間睡眠の暮らしを続けた。日本映画史上最高製作本数を記録した1960年、とうとう体調を崩し、初めて長期で休養をとる。疲れ切っていた。活躍を評価する声がある一方、「金持ちの服しか作らないデザイナー」「映画衣装は本物の創作ではない」など心無い言葉も多くあり、幼い子ども達のことも気に掛かって仕事をやめようかと思い詰めた。塞ぎ込む森に雑誌『装苑』編集長、今井田勲がフランス行きを勧めた。森の復活を心から望む今井田は、気乗りしない夫を何度も説得し、援助を惜しまなかった。

そうして訪れた初めてのパリで、森の心をつかんだのはシャネルだった。上品なモデルたちが着こなすシャネルの服に、女性の美しさを引き出す力を感じ取った森は、コレクションを見た数日後に自らスーツを作りに、シャネルのサロンへ向かう。客として服作りを経験する中で、注文伺いや仮縫い、ブラウスやスカートなどアイテムごとに担当を分ける制作システムを知り、感銘を受けた。疲れ切っている要因は自分にもあったのだと、帰国後は制作工程を見直した。また、シャネルは森の黒髪を褒め、それに合う色を提案し、細部まで神経が行き届いた服を作ってくれた(図2)。アーティストの作品でありながら、着用者の個性を引き出し暮らしに寄り添う着心地のよい服に、目指す服の姿が見えた森は、活力と仕事への意欲を取り戻す。

帰国すると5月に自身の作品を発表、6月にパリで買い付けた既製服の展示会、7月には既製服ライン「VIVID(ヴィヴィド)」を立ち上げ、8月にはアメリカへと渡った。

既製服産業が確立されているというアメリカでは、特別なドレスでも日常着でも、誰もが必要な服をすぐに入手できる状況を目にした。どの店もサイズを豊富に揃えて色々な体型に対応する。また、ケネディ大統領夫人であるジャクリーヌの専属デザイナー、オルグ・カッシーニのアトリエも訪問(図3)。歓迎してくれた彼の雰囲気と、よく売れるものが良いものとされるアメリカの価値観の中で、強い個性はないが女性の求めるものを的確に作るその仕事ぶりに、着用者を尊重する服作りをしたい森は可能性を感じた。一方で、高級デパートの最上階で取り扱われることが最高のステータスであるアメリカの服飾市場にあって、地下で日本産のブラウスが粗悪品として売られている状況や、メトロポリタン歌劇場で見た『マダム・バタフライ』の蝶々夫人がげたで畳を歩く姿には屈辱を感じた。森は服を通して敗戦国の汚名を返上することを誓い、そこから約4年に渡る準備期間に入った。

※『グッドバイ・バタフライ』(2010年、文芸春秋社)p. 30

(廣田理紗　当館専門学芸員)

開館20周年記念企画展「美術館がうまれて、それから―コレクションと石見美術館の20年―」

2025年12月20日(土)～2026年2月23日(月・祝)

休館日：毎週火曜日、年末年始(12月28日～1月3日)　開館時間：9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

企画展

A

B

A. 岡田三郎助
《黒き帯》 1915年

B. ガブリエル・シャネル
《イヴニング・ドレス》
1927年頃

この地に美術館がうまれて、それから何が起こったか?

2005年に開館した島根県立石見美術館(以下、当館と表記)は、今年で開館20周年を迎えた。冬の企画展「美術館がうまれて、それから―コレクションと石見美術館の20年―」では、コレクションや資料をとおして、当館が歩んできた20年間の歩みを振り返る。当館は、1980年前後よりはじまった、一連の「美術館建設ラッシュ」が過ぎ去って以降に建設された、全国的に見ても新しい美術館である。加えて、島根県内では2館目の県立美術館でありながら、分館ではなく特色あるコレクションをもつ独立した館として、島根県益田市という当時の人口が5万人程度だった都市に設置されたという大きな特徴がある。

すでにご存じの方も多いであろうが、当館では設立当初から現在まで「森鷗外ゆかりの美術家の作品」「石見の美術」「ファッション」の3つの収集方針を打ち立て、それに基づいて作品の収集を行ってきた。収集が始まった平成11年度、はじめて購入したのは岡田三郎助《黒き帯》、藤田嗣治《青いドレスの女》、東郷青児《婦人像》の3作品であった。これら3点のすべてが、女性の姿を描いた絵画作品であることは非常に興味深い。本展の冒頭では、同年にはじめての寄贈をうけて収集した岡野洞山美高《竹林七賢・商山四皓図屏風》を加えた4作品を一堂に展示することを予定している。収集活動、ひいては当館のはじまりともいえるこれら4作品は、それぞれどの収集方針に紐づけられ、どのようなねらいのもとに収集されたのか。ぜひ会場で作品を実見し、確認していただきたい。

本展では、3つの収集方針をもとに主な章立てを構成し、粒ぞろいの当館コレクションのなかでも特に見どころの多い作品を選んで展示する。「見どころ」とひとことに言っても、それぞれの作品がもつ「見どころ」は多種多様である。作品自体の魅力のみでなく、当館に収集され、展示や調査研究がなされたことで見つかった新たな「見どころ」も、できるかぎり余すところなく紹介する。

また、美術作品に加えて、美術館が益田市に建設されるに至るまでの経緯を振り返ることのできる、美術館の計画段階より刊行されていた「島根県立西部美術館準備ニュース」などの資料も展示する予定である。建設前の刊行物や資料からは、当館がどのような要請のもと作られた施設であるか、当時の期待の内実を読み解くことができる。加えて、このような資料は、そうした期待に当館がどのように応えてきたか、翻って何を取りこぼしてきたのか、さらには当館を取り巻く状況が20年でどれだけ変化したかをはっきりと逆照射する。当館を深く知るための手がかりとして、コレクションだけでなく、普段美術館で展示することのない貴重な資料もあわせてお楽しみいただきたい。

それから本展に先駆けて、今年の4月より当館はコレクションデータベースのオンライン上での公開を開始した。まだすべての作品を公開できるまでには至っていないが、今後もより充実したものを目指し、公開する作品をふやしていく予定である。

本展は「石見美術館」自体を大きなテーマとしているが、その一方で「石見美術館と地域のつながり」も、やはり本展に通底するテーマである。20周年という大きな節目の年の冬、これまで当館を育ててこられた地域の方々はもちろんのこと、当館にあまり親しみのなかった方々にとっても、本展が石見美術館そのものの魅力や歴史、特長を知るための一助となれば幸いである。

(大谷姫歌　当館学芸員)

コラム

開館20周年を迎えて

100年に向かう20年

島根県芸術文化センターは、2025年10月に開館20周年を迎える。この節目にあたり、これまでの歩みを石見美術館の活動を中心に振り返り、この後の進むべき道について記したい。

地元では愛称「グラントワ」(フランス語で「大きな屋根」の意)で親しまれている当センターは、地域の文化振興の拠点という役割を担い2005年に開館した。開館後の10年間は、初代センター長・澄川喜一のもと地域に根差した活動を大切にしながら歩みをすすめてきた。開館までの経緯と10周年までの取り組みについては、当時の椋木学芸課長による「100年に向かう10年」(本ニューズレター vol.21)に詳しい。

地域密着の理念は、2015年からの10年間の活動においても受け継がれ、実践されてきた。石見美術館では「森鷗外ゆかりの美術家の作品」「ファッション」「石見の美術」を軸に独自の企画を数多く実施した。

例えば森鷗外と親交のあった美術家、原田直次郎と大下藤次郎、それぞれの個展を開催し、鷗外の生きた時代の美術動向の一端を明らかにした。

「ファッション」の領域では、戦後のファッションを社会や流行を切り口に通覧した「ファッション イン ジャパン1945–2020」と、自然布をテーマにそれらを育んだ風土と暮らしのつながりに光を当てた「コズミックワンダーと工藝ぱんくす舎　ノノかみと布の原郷」のふたつの展覧会を同時開催し、日本のファッションの歩みとその行く末を多角的にとらえることを試みた。

石見地方の中世に焦点を当てたふたつの展覧会「石見の戦国武将」「石見の祈りと美」では、地域の歴史と文化の豊かさを再認識する機会となった。他方、石見出身のアーティスト平川紀道と野村康生による二人展「既知の宇宙・未知なる日常」では、映像やインスタレーションにより、来館者の感覚を刺激する体験を提供した。同展は、価値ある作品が編集されて並ぶ既存の展示とは異なり、アーティストが提示する未知のヴィジョンを体験する機会となった。

多くの人がリアリティを感じ、面白いと思えるテーマを設定した展覧会も実施してきた。展覧会「美男におわす」では、過去から現代にいたる「美男」イメージの変遷をたどり、理想の男性像に人々が求めたものを探る内容で、これまでにない切り口が注目された。アニメ界の巨匠である富野由悠季や安彦良和の個展では、独自の世界観と創作の軌跡に光を当て、幅広い層に向けた企画を実現した。

建築家・内藤廣の個展は、当館の建築がその代表作の一つであることに加え、ここでのみ開催された大規模な展覧会であったため、全国から多くの来館者を集めた(図1)。また、この展覧会をとおして、内藤の当センターやこの地域への思いが職員の間でも共有され、受け継がれていくきっかけともなった。

この10年間の活動で特筆すべきは、美術館と劇場の複合施設という特性を生かした両者のコラボレーション企画「ミューシア」の深化だろう。展覧会と連動し、バレエ(図2)や古典調律の音楽会、中世石見の歴史をリサーチして制作したパフォーマンス、森鷗外のドイツ三部作の朗読会、さらにグラントワの建物を舞台に、劇作家が描いた物語を観客が地図を手に巡りながら体験するドラマ・インスタレーションなど、多彩な試みが展開された。美術館と劇場の枠を超え、両者の協働によって生まれる新たな創造の場として「ミューシア」は成長を続けており、グラントワならではの活動として定着しつつある。

かつて内藤廣は、当センター建設のプロジェクトを振り返り、「眠ったような益田の街の復活には100年から200年は必要」と語った(内藤廣『形態デザイン講義』2013年)。その言葉に象徴されるように、地域の文化や街の再生には、長い時間と継続的な取り組みが不可欠である。その「100年」に向かう最初の20年間、グラントワは、地域の文化資源に光を当てる展覧会や、多様な視点から現代社会とつながる企画を通じて、地域に種を蒔くような活動を積み重ねてきた。2022年に就任した的野克之センター長のもと、澄川前センター長の目指した方向性を受け継ぎながら、これまでに蒔かれた小さな種が、地域に新たな価値をもたらすことを信じ、これからも歩みを続けていく。

(南目美輝　当館学芸課長)

図1. 企画展「建築家・内藤廣 BuiltとUnbuilt　赤鬼と青鬼の果てしなき戦い」会場
写真提供:内藤廣建築設計事務所

図2. 企画展「エドワード・ゴーリーの優雅な秘密」に合わせた
ミューシアvol.4「エドワード・ゴーリーの優雅ないたずら」

島根県立石見美術館ニューズレター
2025年7月25日 発行

〒698-0022 益田市有明町5-15
TEL: 0856-31-1860　www.grandtoit.jp